石桜同窓会報

石桜同窓会
盛岡市長田町
岩手高等学校内
印刷　山口北州印刷

石桜同窓会　定時総会終わる

◇…平成4年度石桜同窓会定時総会は去る10月30日(金)盛岡駅ターミナルのホテルメトロポリタン…◇盛岡で午後6時から開会、今回は遠藤貫中前校長の岩手県県勢功労章受章の祝賀も兼ねて行われた。…◇

総会後の懇親会場で

久しぶりに交歓する同期生

遠藤前校長に松見同窓会長から記念品を贈呈

東京石桜同窓会　盛会裡に開催

10月17日(土)第一〇回の東京石桜同窓会は、東京九段のアルカディア市谷で約90名の参加者で盛会だった。

山中順三元校長も来会され、松見同窓会長、西在家校長のほか同窓会事務局から中舘脩悦、佐藤正俊両先生が出席した。

開会の辞は原章副会長(旧18回)、雪ノ浦弘会長(旧17回)が挨拶のあと、山中順三元校長、西在家校長、松見同窓会長の順で来賓として挨拶。懇親会に入る前、玉川大学コーラス部の特別出演があった。

新12回卒の国立音楽大学助教授瀬川武君の好意で同君が日頃指導している玉川大学のコーラス部が招かれ、親しみのもてる数曲のあと、校歌、応援歌の合唱もあった。専門家の指導による校歌、応援歌は極めて新鮮で快い刺激だった。収録のテープが後日事務局へ送られる筈なので利用されたい。

松見同窓会長挨拶

西在家校長より祝辞

松見得明同窓会長は10月17日開催の東京石桜同窓会に出席したこと、平成7年の母校創立70周年が迫っていること、また石桜振興会から母校創設者の「三田義正伝」の刊行が間近であることなどを含めて冒頭挨拶があった。

西在家校長は本年4月遠藤前校長に代わって校長に就任されたが、同窓生各位には校長就任以来はじめての挨拶とあって、総会祝辞の中で、校長就任としての挨拶も兼ねた。

遠藤前校長挨拶

本年3月で勇退された遠藤前校長は、自分の岩手中学在学時代の思い出にはじまり、校舎建築など、校長として在任中の忘れ難い思い出の数々など、人生の大半を母校と共に歩んだ五十有余年をふり返り、また同窓会活動がいよいよ盛んなことを祝して退任の挨拶とした。

同窓会決算、予算を審議

次いで平成3年度同窓会決算案と4年度予算(別表)が提案され、説明のあと可決した。

一〇〇名余の懇親会

懇親会の席上、栃内松四郎同窓会副会長が、県勢功労章を受章した遠藤前校長の経歴を改めて紹介、松見同窓会長が同窓会からの祝賀記念品として校章の入った木製レリーフを遠藤前校長に贈呈した。

遠藤前校長からの謝辞のあと、下河原善嗣郎同窓会副会長の音頭で乾杯し、懇親会に入った。

その中で、松見得明会長が旧13回卒の大西博君を紹介。大西君は鹿児島大学教授を退官して本年郷里盛岡に戻り、去る9月5日母校の石桜祭第一日目に体育館で全生徒を前に講演したことなどを伝えた。

岩手中・高等学校創立者「三田義正」刊行にあたって

石桜同窓会長　松見得明

三田義正翁の伝記刊行を思いたってから既に五年有余。ようやくその刊行をみるに至った。思えば遠い道程であった。

執筆者藤井茂氏のご苦労はもとより、資料や談話を寄せて下さった皆様のご協力ご厚情には感謝の言葉に苦しんで余りあるものがあるが、されば と言って充分な言葉があるわけではない。平凡に「ありがとうございました」と申しあげてお許しを願う次第である。

この企画は、第一回生として入学した私にとってはかねての念願であり、且つ三田翁生誕一三〇年を期してとの願いもあり、気が気でなかった。

憶うに国公立校には特定の創立者もなければ、従って創立に当たっての建学の精神というものもないのが通例である。私学には必ずそれがある。而もそれぞれの独自性をもち、自尊の気概さえもっているのが常である。

本校についていうならば、創立者は郷土の偉人三田義正翁であり、その建学の精神は三綱即ち「積慶」「重暉」「養正」である。校歌にはこれを「神と祖国と人道」と歌い、その端的象徴としての石割桜が校章に刻まれている。

私達はその校章をつけ、機あるごと折にふれるごとに校歌を歌い歌いつゞ、石桜精神の発揚に努め自己実現に精進しいたっているのである。

然しながら創立以来七〇年に及んでは、校風継承の中に生かされてはいるものの、歴史性のなかに埋没し本然の光輝に浴するに遠き感、なきにしもあらずと憂うるのである。

かかる折、翁の伝記の刊行は、改めて岩手中・高等学校創立の趣意とその経緯を詳らかにし、建学の精神を顕在ならしめることとなり、ひいてはこの学び舎に学び学んだことの、幸いと誇りを喚起することにもなるのではないだろうか。

平成4年度同窓会予算案

I　経常部

収入の部　(円)

科目	本年度予算額
会費	1,265,000
入会金	759,000
総会会券代	500,000
利子	10,000
雑収入	80,000
繰越金	841,118
合計	3,455,118
支出の部	
会議費	700,000
石桜会補助金	300,000
印刷費	500,000
慶弔費	50,000
通信費	400,000
事務費	20,000
事務手当	60,000
雑費	300,000
基金部編入	500,000
予備費	625,118
合計	3,455,118
II　特別会計(基金部)	
経常部より編入	500,000
利子	100,000
繰越金	4,337,151
合計	4,937,151

平成3年度同窓会決算報告

I　経常部

収入の部　(円)

科目	決算額
会費	1,330,000
入会金	798,000
総会会券代	590,000
利子	21,201
雑収入	121,000
繰越金	1,626,498
合計	4,486,699
支出の部	
会議費	720,551
石桜会補助金	168,000
印刷費	506,245
慶弔費	62,567
通信費	347,332
事務費	3,521
事務手当	60,000
雑費	277,365
基金部編入	1,500,000
予備費	0
合計	3,645,531
II　特別会計(基金部)	
経常部より編入	500,000
利子	95,413
繰越金	2,741,738
合計	4,337,151

平成5年度　生徒募集要項

		高等学校		中学校
		推薦	一般	—
募集定員		約50名	200名	20名
出願期間		1月8日(金)～1月13日(水)	1月16日(土)～1月22日(金)	2月22日(月)～3月5日(金)
試験期日		1月18日(月)	2月1日(月)	3月7日(日)
試験科目		数・英(2科目)	国社数理英(5科目)	国語・算数
選抜方法		学力検査、面接、調査書、との総合判定	筆記試験、調査書との総合判定	筆記試験、身体検査、報告書、面接、の判定
合格発表		1月20日(水)	2月8日(月)	3月11日(木)
入学手続締切日		1月27日(水)	2月18日(木)	3月18日(木)
毎月納付金	授業料	16,000円	16,000円	不要
	施設費	5,000円	5,000円	1,000円
	石桜会費	700円	700円	700円
	PTA会費	200円	200円	200円
	計	21,900円	21,900円	1,900円

◆中学校は授業料を徴収しません。
◆寄宿舎の施設があります。
事務局　〒020　盛岡市長田町7番60号
☎0196-24-4445(代)

校風永扇

ここ数年、必ず8月に大事件が起きている▽順序はもはや定かではないが、ジャンボ機が墜落した。潜水艦と釣り舟が衝突した。連続幼女殺害犯が逮捕された。イラクがクウェートを併合した。ソ連で革命が起こった…▽夏の甲子園大会のテレビ観戦中に毎年、これらの事件が速報で知らされてきた▽条件反射で夏の甲子園大会中には必ず何かが起こるという予感さえ持ち始めていた▽今年は何事もなく甲子園大会も閉幕するかと思われたが、その高校野球そのものに大事件(?)が起こった▽明徳義塾が星稜の強打者松井を徹底的に敬遠、一点差で逃げ切った▽マスコミは社会面にまで大きく取り上げ、日本中が突然、教育評論家、スポーツ評論家であふれ、侃々諤々▽高野連会長も異例の談話を発表し、それが更に論議を呼び、明徳チームは外出もできず、練習に護衛がつくという異常事態にまで発展した▽明徳の監督は沈黙を守っていたが、後日ある雑誌にその心情を吐露した▽「一人一人の技量ははるかに劣っていても、皆で力を合わせれば強い相手や困難にもうち勝つことができる、ということを教えるのは教育ではないのですか？」▽ここにアメリカの少年野球指導者の言葉がある▽「我々がこの子達にしてやれることは、こんなに楽しい野球を明日もやりたい、あさっても、5年後、10年後もやりたいと思わせることだ」▽学問に王道がないのと同じく、教育にもまた王道はない▽様々考えや信念を持った人が様々の方法で、それでも若者に気を配るのは社会生活を営む人間の本能だろう▽本校も義正翁の信念のもと、齢70年を迎えようとしている▽

大小御宴会・御商談等に御利用下さい。
御食事処　きのえね支店
盛岡市本町通1丁目17-6
電話 22-9346

いい視力・いつまでも
メカネの水晶堂
〒020 盛岡市中の橋通1丁目(水晶堂ビル)
中の橋店　☎盛岡0196(53)3434
サンビル店　☎盛岡0196(22)9595
補聴器ルーム(水晶堂ビル2F)☎盛岡0196(53)3435
コンタクトルーム(水晶堂ビル3F)☎盛岡0196(51)3636

月星化成株式会社岩手県総代理店
履物総合卸商社
斎福商事株式会社
岩手県紫波郡矢巾町流通センター南一丁目6-4
TEL (代)(38)2131

私が歩いた道

大西　博君(旧13回生)

さわやかな秋を迎えた9月5・6日の両日にわたり、45回目の石桜祭が開催された。その初日、大西博君(旧13回生)による講演が行われ、感銘を受けた恩師の言葉や研究に対する情熱を語り、生徒たちに大きな刺激を与えた。

私は昭和13年、本校に入学して戦争中の昭和18年に卒業して後、高校、大学、就職と50年もの間、この盛岡を離れておりました。50年も経ちますと、もうすっかり変わってしまうものですが、本校は、校舎は新しくなってたいへん立派になっても、私どもが仁王田圃といった思い出の多いこの土地に、そのままある。

今日は〝私が歩いた道〟ということで「思いつくままに、感想を交えながら、わたしの実際の体験談をお話ししよう」と思います。

私は社会に出てから、キッコーマンの野田産業科学研究所というところで26年余り、その後、鹿児島大学の農学部で17年余り、終始、応用微生物学という学問を研究し、またその教育の仕事をしてまいりました。

岩中時代の勇気と自信

私の岩中時代の校長先生は、佐々木哲郎先生でした。私が高校受験の時に、恐る恐る校長先生に「一高を受験したいと思いますが」と申し上げたら、先生は即座に「やってみるか」と、こう言われたんですね。それは私にとって、非常に強い印象として残っています。

その当時は戦争中で、日本も容易ならざる時代でした。学徒出陣といって、大学生などがどんどん兵隊にいく。今ですと受験に失敗したって、「予備校に入ってやり直せばいいじゃないか」と、気楽なものですが、当時はそうはいかなかった。もしも受験に失敗すれば〝すぐ兵隊にいく〟という覚悟をしなければならない時代でした。

そういう時に、校長先生は「この際、もっと確実に入れるような所に、志望を変えてみたらどうか」というようなことは、一切なかったのです。私はこれによって勇気づけられました。

佐々木校長先生の次の校長先生は、山中順三先生で、私は英語を教わりました。先生は、独特の系統的な英語の教授法で、非常に分かりがいい。私などは今でも本当にありがたく思っております。先生は、我々が中学の1年の時から『ウィークリー』という、1枚の紙ペラですが、週刊の時事英語新聞があって、それを教科書以外に皆に渡して、生きた英語を低学年のころから教えてくださった。思い出してみますと『双葉山と』いう相撲取りが優勝した」とか『支那事変で南京が陥落して、提灯行列をした』とか、それくらいのことは、この中学1年の英語の新聞に書いてあった。

このような国際化の時代になりますと、どんな仕事をするにしても語学というものは、たいへん重要になってきます。どうか英語だけはと言うと叱られるかもしれませんが、しっかり勉強してほしいと思います。

それから、思い出されるのは漢文の先生で、竜沢良吉というカイゼルひげを生やした、老大家の風格のある先生のことです。非常に格調高い講義をなさった。ですから漢文の力は「私はどこにも負けない」というぐらい、自信がついたんです。1年から5年まで、同じ先生にずっと習ったのは、漢文だけでした。5年までの教科書を、4年生の時に全部終わっちゃったんですね。後の1年間は、もっと高度の教科書を買わせまして、それについて習ったことが思い出されます。

人間形成の基礎を築く

という訳で、背水の陣で臨んだ一高の入学試験にも、さいわい受かったわけです。一高というところは全寮制度なんです。全校生徒が全部、寄宿舎に入る。たとえ学校の隣に自分の家があったとしても、自宅から通学することは許さない。授業時間だけでなく、24時間起居を共にして、いわゆる『同じ釜の飯を食う』という形ですね。そうすると四六時中、自分のクラスの者でないいろんな奴とも、しょっちゅう顔を合わせて話し合いをしているから、友達もたくさんできるし、お互いに鍛え上げられるという面があるわけです。いろんな考え方の若い者が学校に入って来る。それは非常にいいことなんですね。個性が違う。しかも感受性が豊かだ。若いからですね。そういう人が、自分をさらけ出し、ぶつかり合って、切磋琢磨というか、お互いに磨きをかけるわけです。そういうのがまさに、教育の理想だと思っています。

考えてみると、私の高校時代は、戦時中の暗い時代でありましたが、それでも人間形成の基礎というようなものは、あの時代に、同じ釜の飯を食って培われたような気がしております。

高校で満足に教室で授業ができたのは、たった1年間です。あとは茨城の日立製作所とか、川崎の三菱重工業という所に、勤労動員をさせられました。いくら勉強をしたくても、させてもらえない時代だったんです。そういう場合に、工場のわずかの休み時間に、岩波文庫を貪り読むとか、あるいは夜になると、寄宿舎に先生が来られて、多少の講義をしてくださるというようなことがあった。そういう大変な時代でした。

忘れられない校長の言葉

当時の校長先生は安倍能成先生で、哲学者でした。先生は常に、「自分自身で飯を食わなければ、自分の腹はきつくならないよ」と言われておった。他人がいくら飯を食ってくれても、自分のひもじさは決して直らない。つまり、自分自身で汗を流して、苦労をして、物事を習得しなければ、本当に身につかない。社会に出て、あなた方も仕事をしてみるとよく分かりますが、学校でちょっと試験のために勉強したなんてものは、すぐ忘れてしまいますが、私などが実験で自分で苦労してやったことは、全部面白いように体について、これはもう忘れない。もうひとりでに体が動くのです。

もう一つ、先生が言われたことで思い出すのは、中国の書物に『中庸』というのがあります。『誠は天の道なり。これを誠にするは、人の道なり』と書いてあるわけですが、これの先生の解釈は「人間の生まれつきというものは、神様が決めてくださったものであって、どうにもならない。しかし、一生懸命努力をして、それを高めるということは、人の道だ」ということです。

私は盛岡から上京して高校に入ったら、周りの奴は頭がいい。秀才に見えてしょうがなかったんですが、この安倍先生がおっしゃるように、生まれつきはどうにもならないんで、私の頭はこれくらいの頭かもしれない。しかし、自分で努力をして、その頭を鍛えていくのは、これは各人の問題であって、それは大事なことだ。私も〝なるほど、そうだ〟と思って、今でも先生の言葉は忘れられません。

人間は金づちではない

高校時代に立沢先生というドイツ語の先生がいました。これはもう強烈な個性の持ち主で散々な目に遭ったんです。

〝懲らしめてこその教育である〟ということがありますが、とにかく、あれくらい苛められますと、まさにいい意味の〝懲らしめてこその教育〟です。「その実がまさに上がっている」と言わざるを得ないくらい、いろんなことを教わりました。私の試験が0点だったというんです。それを「50点につけておいたから、今度は100点満点取って、50点返してくれ」というわけです。

その先生は、常に「〝人間は金づちではない〟ということを信ぜよ」と言うんです。金づちですと、水の中に入れるとブクブク沈んでしまう。そして浮かび上がってこない。ところが「人間は金づちではないんだから、水に入っても必ず浮かぶ」と。よく「できが悪くて叱られる時は、思い切って飛び込んでみたまえ」と言われるんです。

「思い切って飛び込んでみたまえ」とは、「〝人間は金づちではない〟ということを信ぜよ」ということなんです。要するに〝勇気を出して物事に挑戦して、努力をすれば、必ず成功する〟というのが、先生の教えだったわけです。

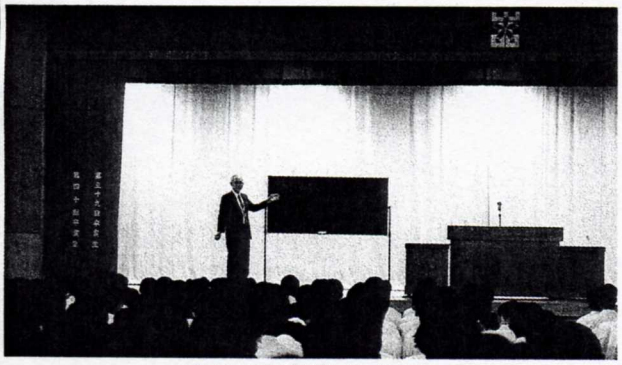
酵母の研究で発見の連続

農芸化学科時代

私は食品の製造とか、あるいは農産物の加工というようなことに興味がありましたので、大学は農学部の農芸化学科に進みました。今は、全国の大学の農学部の改革が行われ、農芸化学科という科の名前は段々消えてきて、応用生物化学科とか生物資源化学科というようになっています。

私の大学の農芸化学科の時代は、種なしブドウに使うジベレリンという、植物ホルモンの発見で有名な蔀田貞治郎先生、住木諭介先生、あるいは醸造学の大家で、お酒の先生としても有名な坂口謹一郎という先生がおられました。蔀田先生と坂口先生は、文化勲章をお貰いになった先生でありますが、そういう方から教わったわけです。

有機化学の先生で、後藤格次先生という方がおられました。その先生は「知らざるを恥とせず。学ばざるを恥とする」としょっちゅう言われておりました。「世の中にはいろんなことがあるが、それを全部覚えるわけにはいかないから、決して物知りである必要はないんだ。しかし、自分が仕事をしていく上に、あるいは生きていく上に必要であると思ったことは、自分で進んでそれを学び取らなければいけない」ということです。これは私も鹿児島大学で、自分の教室の連中には、よく言っていたことです。



全在校生を前に講演をする大西博君

キッコーマンに入社して

さて、私の専門とする応用微生物学とはどういう学問かといいますと、微生物はいろいろありますが、糀カビとか酵母とか、あるいはバクテリアというようなものの働きを上手に利用して、それを人間の生活に役立たせようという学問です。

応用微生物学には、どんな分野があるかといえば、まずお酒にしても、醤油にしても、そういう日本古来の伝統的な醸造工業というのがあります。それから今は、いろんな酵素を微生物でつくる。それから、化学調味料も微生物の発酵でつくる。それから抗生物質をつくる。そういうような、いわゆる発酵工業に関するもの、それから、先端技術としてのバイオテクノロジーといったものも、もちろん含まれています。

私は大学を出てすぐ、キッコーマンに入社して、野田産業科学研究所というところにおりました。「酵母によって盛んに発酵していなければ、おいしい醤油はできない。酵母の作用が大事なんだから、酵母の研究をするように」と言われ、ずっとそういう関係の仕事をするようになったんです。

醤油酵母というのは、醤油のモロミの中で盛んに発酵します。もちろん、中で生育もします。醤油というのは、ご承知のように、食塩が18%も入っていて塩辛い。ということは、多くの微生物にとっては、たいへんに厳しい環境なわけです。たとえば、お酒の酵母とか、ビールの酵母を醤油の中に入れると、みな死んでしまう。ところがそういう厳しい環境でも、それに耐えて生育し、発酵作用をするのが醤油酵母であり、耐塩性酵母といわれているのです。

好塩性の微生物

この他に塩を好む、好塩性の微生物もおりまして、これはどういう微生物かというと、水とか海の中にも住めない。どこに住んでいるかというと、死海(デッド・シー)です。イスラエルの近くにあり、飛び込んでも沈まないという。あるいは塩田。日本にはもうなくなりましたが、昔、塩田というのがあって、そこで塩をつくっていたのです。外国には今も塩田がありません。あるいは塩の魚などに好塩性の微生物はいるんです。塩漬けといっても、今は冷蔵庫もあるし、うす塩の食品も出ていますが、昔は、塩の塊がくっついているような塩造の魚があって、そういうのにいるわけです。

さらに中度好塩菌と高度好塩菌というのに分かれ、この中度というほうは、醤油なんかにいるわけです。高度というのは、いま言ったような塩田とか塩湖におります。生命が誕生したのは、35億年前だとか、40億年前だとか、いろいろ言われていますが、こちらは驚くなかれ、古細菌という、そのころできた細菌です。つまり、あなた方が生物の時間に習われるこの原核生物と真核生物、そういう二つの生物界のほかに、実は第三の生物界がある、ということになりまして、好塩菌というのが、にわかに注目を浴びるようになってきたわけです。

一つの発見から始まった

私の仕事は、醤油のモロミの熟成期間における酵母の種類と数がどのように移り変わるかということを調べることから始まりました。

それにはどうするかというと、こういうシャーレに、寒天を固めて、醤油のモロミを適当に薄めて巻くと、酵母のコロニーが出てきます。これを今までの一般の人が使っていた培地を使ってやりますと、ブクブク発酵しているにもかかわらず〝こんなに酵母の数が少ないのか〟と思われるくらい少なかった。たとえば、1mlのモロミの中に、10の5乗、数10万、多くても100万ぐらいしかいない。「そんなことはない。これはおかしいぞ」ということで、醤油の食塩の濃度は、さっきも

ご昼食・ご商談・ご宴会
料亭 京極(ニコット キョーゴク)
盛岡市大通1丁目8－4
☎盛岡25－9459(代)

銘菓の店
山善
お贈物に
お土産に
お茶うけに
盛岡市材木町2－21
TEL (22)2618

和洋酒・食料品
株式会社 鍵屋
盛岡市中ノ橋通1丁目5番25号
電話 代表(24) 2036番

●大西博君略歴
旧13回生。卒業後旧制一高、東大農学部と進み㈱野田醤油（現キッコーマン）入社。昭和36年、抗滲透圧性酵母の研究により、日本農芸化学賞受賞。昭和49年より鹿児島大学農学部教授となり平成3年に退官、郷里に戻る。

言ったように18%です。これを加えた培地を使ったら、これがたくさん出てきたわけです。数十倍から百倍くらいもコロニーが出てきたのです。

これが、私の駆け出し時代の一つの発見であり、これから私の仕事が進むことになったのです。この発見とはどういうことかというと、耐塩性酵母というものは、塩に耐える、そういう遺伝的な性質は持っているんです。ところが、そういう耐塩性酵母であっても、この食塩が0のところから、急に18%のところに移る、変化する。あるいは18%の食塩の環境から突然、食塩が0のところに移される場合は、かなりのストレスを受ける。大部分は参ってしまう。この耐塩性酵母を取り扱う場合に、何が一番大事かというと〝食塩の濃度を、常に注意しておかなければいけない〟ということを、この簡単な仕事から気が付いたわけです。

研究者として

そうなると次は、私はこの耐塩性酵母を使って、食塩の0のところと、18%の食塩のところで、生育とか、発酵作用にどんな違いがあるか、ということを調べようと思い、それをいろんな項目について、詳しく調べたんです。そうしたら、面白いように、いろんなことが見つかってきた。今まで知られなかったことがいろいろ見つかってきて、学術論文にどんどん載りますし、それが学会で認められて、農芸化学賞ということになったわけです。

私があなた方に申し上げたいのは、「いつも同じ方向からものを見ているけれども（私もそうですが）、ちょっと角度を違えて見ただけで、今まで見えなかったものが見えてくるということがあるんだ。そしてそれが、案外大事なことになる。そしていろんなことが開けてくる」ということです。

その後、私は昭和38年に、カナダのオタワのナショナル・リサーチ・カウンセルという国立の研究所にまいりました。そこでギボンス先生という、世界で一番の好塩菌の学者から、私が学んだことは、実験の技術というようなものよりも、むしろ研究者の態度というようなことでした。

どういうことかといいますと、日本人というのは、得てしてそうですが、外国の人のたいへん優れた論文を読むとそれを真似してみたいような気が起こり、私もちょっと人の論文と似通ったようなことをやってみようと思って、ギボンス先生に言ったところが、「オール・レディー・スタディーズ」だと言うんですね。「それはもうほかの奴が、すでに研究して分かっていることだ。そんなものをやる奴があるか」と言って、もう全然話に乗らないわけです。

つまり先生は〝常に独創的なものでなければ、仕事にならない〟という考え方ですので、私も〝やはり我々の世界では、独創性ということが一番大事なんだ〟ということを、よく教えられたわけです。2年間オタワにおり、その後、鹿児島大学にまいったのですが、鹿児島大学では、主にこの好塩菌の仕事をしておりました。

やってみますと、好塩菌もいろんなことがありまして、それが段々認められるようになり、オーストラリアとか中国、カナダなどに客員教授などで呼ばれて出掛けたりしました。一昨年は、スペインのヨーロッパ微生物学会連合の国際学会に招待講演を頼まれ、バイオ・リアクターを使った、好塩菌の利用面のことをお話ししてきました。そういう意味で私としては、研究者という仕事がよかったんだと思っているわけです。

醤油は先祖の大発明

醤油の起源は数千年前

では、〝醤油の起源〟というようなお話を、ちょっとしてみたいと思います。

醤油の起源を辿ってみると、どうも中国の〝ショウ〟ということにいきつくようです。魚の肉でも、家畜の肉でも、塩漬けにしておくと長持ちする。それだけじゃなくて、かえっておいしくなることがある、ということに気が付いて、中国では数千年の昔に、このショウが生まれたんです。

中国の周の王朝時代の制度や、儀礼を記した『周礼』という書物にショウという記載があります。このショウというのは、獣の肉とか魚の肉を、粟の糀と混ぜる。それにさらに塩を加えて〝美酒〟とありますから、おいしいお酒を混ぜて『壺で漬け込むこと100日にして成る』つまり「壺に100日間漬けておくと、このショウというものが出来上がる」と書いてある。ここで大事なのは、このショウというのは動物性のものが原料で、大豆などを使っているのではなく、獣の肉を使っているのです。

このショウというのは、たいへんにおいしいもので、日常の食膳には欠かせなかったらしく、孔子様も『そのショウをいざれば、食らわず』――「ショウがなければ食べない」と言っている。そういうショウが、周の時代にちゃんとあった。

そうして時代が下って、漢の時代になると、このショウが肉だけでなくて、大豆を使ってショウをつくる。ですから、この漢の時代のトーショウというのは、大豆に穀類の糀を加えて、塩を加えてつくるのです。ここで初めて植物性のショウが生まれてきたわけです。これが醤油と味噌のルーツに関しているようで、私の恩師の坂口先生の学説によると、この漢の時代に、ショウがこのように増えた。

多目的な調味料として

その他に、日本読みにすると、イ・シ・オと読み、こっちはクキと読むんですが、ショウの他にシというものが出てきた。このシというのはどういうものかというと、大豆を煮て、それを糀にしちゃうんですね。大豆の糀。ショウというのは、大豆は煮て、別に置いて、それに粟とか穀類の糀を加えてつくるんですが、こっちは豆だけ。豆全部を糀にしちゃうんです。そして塩と混ぜてつくる。

シのほうはどういうことになるかというと、全部を糀にするもんですから、蛋白などの分解もよく、味がいいわけです。調味料としては、どうもこのシのほうがおいしそうだ〟ということが分かります。

実際の使い方を見ると、ショウは今の日本風に言うと、ソースのように食べ物にかけて食べる。シは、水を加えてシジルとして、煮物用とか味付け用に使っていました。

ショウというのは、豆を煮て、それに穀類の糀を加えてつくる。日本の味噌のつくり方が今もそうなんですね。大豆を煮る。コメの糀とか、あるいは麦の糀、そういうものを加えてつくります。ですから、ショウやヒシュウのほうが、いまは我々の使っている味噌のルーツだ。

それに対してシのほうは、煮た豆を全部糀にしてしまうわけですから、今の醤油のルーツだ。今の醤油は、これから申し上げるようにちょっと違うのですが、材料全体を糀にしてしまうという点が、たいへん違っているというか、面白いところです。名古屋地方にあるタマリというようなものに、今も名残としてあります。

日本の醤油はオリジナル

さて、こうして漢の時代に、発酵調味料がいろいろ分かれて、今日のそういう食品の基礎が出来上がり、それから日本や朝鮮に伝わってきたわけです。

日本にはこういうものが、奈良時代に伝わったといわれていますが、それがどういう形で今日のような醤油になったかということは、はっきりしません。醤油という名前が文献に初めて出てくるのは室町時代のことで、名前だけでなく、作り方までちゃんと書いてあるのは、江戸時代の元禄前後だと言われている。そのころになると、いま日本の醤油業をやっているようなおうちは、大概、仕事を始められたというわけです。

初めは、豆を全部糀にしてできていた。つまり、醤油ができてくる汁などを取って使っていた。今でいうタマリ醤油のようなものだった。それが、いつのころからか、大豆のほかに、小麦も使うようになった。今は、「そうすると一番おいしい」ということになり、大豆と小麦を半々に使って、それを糀にして仕込む。小麦が入ることによって、澱粉質が入るので、糀カビや酵母やバクテリアの分解作用とか、発酵作用を受けて、おいしくなることは分かるわけです。これが実は、我々の先祖の非常に優れた発明ではないかと思うのです。

「日本の科学技術には、どうも独創性がない」「何でも外国の真似ばっかりしている」というふうに言われていますが、いま言いましたように、元を正せば、醤油というものは中国由来のものではあるけれども、それを我々の先祖が、ただそのまま真似をしているだけではなくて、日本の風土に合ったように、これを上手につくり変えた。そして今や、醤油は日本の特産品というか、オリジナルだとまでいえるような状態になった。これなどは、我々の先祖の大きな発明だと思われます。

「後世おそるべし」の願い

松下幸之助さんが、成人式のお祝いの時に「自分の全部の物を投げ捨ててもいいから、若さと取り替えたい」と言われました。こうして若い皆さんの前に立つと、私も全く同じ考えになります。学校の教師をしておりますと、孔子様のいう「後世おそるべし」ということが、本当にそうあってほしい。「後を継ぐ者が、もっともっと立派にやってほしい」と思うわけです。

皆さんも大事な若さと青春ですので、それを卑しくも、おろそかにするということのないように、しっかり勉励してほしいと願うものであります。

ご静聴ありがとうございました。

石桜振興会からの奨励対象

平成4年度の石桜振興会奨励対象は次の7団体1個人と決まり、11月12日校長室において松見振興会長より、それぞれに褒賞金が授与された。

●軟式庭球部
市民体優勝　新人戦・ジュニア選抜上位入賞

●水泳部
高総体・市民体・県民体・新人戦上位入賞

●ハンドボール部
高総体三位

●野球部
秋の県大会に出場（6年ぶり）

●アイスホッケー部
県選手権優勝　インターハイ出場

●テニスクラブ
新人戦・県ジュニア・東北ジュニア上位入賞　中学校大会優勝

●物理部
「科学の祭典」出演　火の玉実験

●方波見将人（3F）
高文祭美工部門（立体部門）特賞「Jūroku」

2年連続で特賞を受賞した方波見君の作品「Jūroku」

石桜同窓会からの奨励対象

団体の部

〈ハンドボール部〉
・第44回高総体　第三位

〈アイスホッケー部〉
・第41回高総体　優勝
・第25回県民体　優勝
・第28回新人大会　優勝

個人の部

〈テニス〉
畑中幸信（3甲）
・第13回県ジュニアテニス選手権大会　16歳以下男子シングルス　優勝
亀野正幸（1D）
・第13回県ジュニアテニス選手権大会　16歳以下男子シングルス　第二位
畑中・亀野組
・第13回県ジュニアテニス選手権大会　16歳以下男子ダブルス　優勝
・第14回東北ジュニアテニス選手権大会　16歳以下男子ダブルス　第三位
（畑中は12月にアメリカ・フロリダ州のハリーホップマンテニスキャンプに派遣される予定）

〈水泳〉
若沢英彌（3C）
・第44回高総体100m平泳　第二位
庭　真一（1E）
・第44回県民体400m個人メドレー　第三位
中沢真人（1D）
長岡真範（1C）
村谷成基（1C）
庭　真一（1E）
組
・第44回県民体800mリレー　第三位
・第44回県民体400mメドレーリレー　第二位

各部の活躍

○ブラスバンド部
全国高文祭沖縄大会出場記念パレード、マーチング発表

○書道部
第15回岩手県高文祭（書道部門）三名入選

高総体におけるハンドボール部の活躍

あなたの記録更新に役立つスポーツ品
藤沢体育堂
盛岡市大通3丁目2－5
☎(0196) 23－1435

割烹
「こう弥」
盛岡市菜園2の8の36
TEL (23) 2622

肉のデパート
丸岩
盛岡市上田一丁目7の11　TEL (24) 6565

三十年ずつの日本とアメリカ

牟岐鹿楼君(旧16回生)

前出の大西博君に続き、10月2日には牟岐鹿楼君(旧16回生)が本校を訪れ、講演を行った。同君は在学中の思い出やアメリカでの体験をユーモアを交えて語り、生徒たちは興味深く耳を傾けていた。

岩手山登山

アメリカの中華料理の中で、一番売れる料理にチャプスイというのがあります。漢字で書くと「雑炊」。私がアメリカにいた約三十年と、日本での三十年をチャプスイの材料にして今日の私の話にさせていただこうと思います。

岩中の頃、楽しく記憶に残っているのは、岩手山の登山です。御来迎を拝んで戻ってくるだけなのですが、山の気に触れて、非常に楽しい経験でした。今、宮沢賢治の本を読んでわかったような気になるのも、岩手山登山のせいかも知れません。

福沢諭吉が『文明論の概略』という本の中で「文明とは人の知徳である」と言っています。知徳の"知"とは、一歩一歩学ばなければならないものです。ところが、知徳の"徳"については「徳義教え難く、亦学び難し、或は一心の工夫にて頓に進退することあるもの」と言っている。つまり徳義、英語で言えばモラリティーは、教えることも学ぶことも難しい。ただ、自分の工夫で良くなったり悪くなったりすると。

同じようにアメリカの諺に「馬を水際に連れて行くことは出来るけれども、馬に水を飲ませることは出来ない」というのがあります。馬はのどが渇いていれば飲むでしょうが、のどが渇いていなければ飲まないわけです。結局、徳義とかモラルといった品性を良くしていく方法は、自分の努力しかないという。ただ、まわりの人ができるのは良い環境をつくってやる、水際に連れて行ってやることだけ。飲むか飲まないかは本人次第なんです。そういう意味で、昔の岩中の岩手山登山というのは、私どもを水際に連れて行ったのであって、飲めることができた人は情操とか知徳を伸ばす役に立ったのではないかと思っています。

アメリカへ

四年生になって岩中勤労隊で、お国のために横浜の三菱重工業へ魚雷艇のエンジンを作りに行った時、空襲に遭って焼け出されました。全員、着の身着のままで理事長のお宅に連れて行かれ(現理事長のお祖父さんです)、三十人くらいでしたが、ススだらけの私どもを風呂に入れていただき、白いご飯をごちそうになって、その晩はそこに泊めていただいて次の日に岩手に帰って来ました。私の親父が岩中の先生をしておりましたので、空襲の後、理事長のところに挨拶に伺ったのですが、そのとき東京は空襲で大変なのでお宅に結局、理事長は「どうせ、焼けるかも知れないから、着の身着のままで、とにかく家に来い」というわけで、理事長のお宅にお邪魔したのです。

その後、何と予科、学部、大学、大学院と約十年そのまま、着の身着のままの状態でお世話になって、学位論文もそこで書いて、私どもの分野で第一人者のところに論文を送って研究者として行けるかと問い合わせを出したところ、「まあ、来い」ということで、一九五八年から六〇年までアメリカ東海岸のフローデンスにあるブラウン大学というところで、応用数学の勉強をしたわけです。

自信というもの

行った当時、アメリカ人は第二次世界大戦に勝って世界のリーダーであるという自信を持って、非常に親切でしたが、人種差別はは っきりしていました。黒人問題を「イコール・アンド・セパレイティド」―平等だけれども分離されている、と。言い訳ですね。私も白人社会の中にいたので、不思議とも思わなかったものです。ところが一九六〇年、マーティ・ルー・キングがバーミンガムで大行進をして、公民権運動の火ぶたを切った。黒人だけが苦しんで、白人が全然知らずにいた時代と、いろいろ混ざり合って知り合おうとした時代と両方見たわけです。私がここで思ったのは、形が先で心は後からついてくるということです。様々な公民権運動の結果、法律ができて、それで黒人のがいろんなところに進めるようになったし、いい黒人の人にも目を開くようになったという感じがしています。私にも、ひとり黒人の学生さんがいますが、彼を見ていると、白人に対する引け目は全然ないし、自信を持ってやっています。

"非常に安全な投資"

チャプスイの材料として福沢諭吉からレイモンド・チャンドラーまで、ずいぶんキョロキョロしてしまいました。

皆さんがこれから勉強していく上で一番大切なことは、自分の進路は自分自身で決めるということです。自分のやりたいことは自分の能力と比べて決めることであって、他の人と比べてはいけません。

それから次に大切なことは、誉められることですね。先生はなかなか誉めてくれないので、自分で自分を誉めるくせをつけることです。

ただ、自分を一生懸命誉めるのは大切だけれども、尊大になったり自分が偉いと思うのは逆効果で、そんなことをすると自分を不幸にして、周りも不幸にするわけです。たいていの場合自分の不幸には気がついていないようですが、ともかく自分が他の人より偉いということは、絶対思ってはいけません。

皆さんが今勉強されていることは、いろいろな知識に幅や深さを加えることになります。アメリカ流に言えば"非常に安全な投資"というわけですので、楽しく勉強していただきたいと思います。

●牟岐鹿楼君略歴
旧16回生。昭和20年卒業後、慶応大学工学部に進み、その後助教授となる。昭和40年から米・カリフォルニア大学工学部教授として渡米。弾性理論の世界的権威として有名。

故戸嶋正夫先生を悼む

新17回生　伊藤勢至

昭和10年本校に着任以来、在職49年、昭和59年に退職された戸嶋正夫先生が平成4年3月2日、盛岡市内丸病院で逝去された。享年79歳。左は卒業生代表の弔電である。

人生最高の恩師、戸嶋正夫先生の御逝去を悼み、慎んで御悔やみ申し上げます。

ありし日の先生から厳しく、そして慈愛あふれる御薫陶を戴きました御陰で、私の今日があるものと、いつも深く、深く、感謝をいたしておりました。高校三年間は、寄宿舎の三年間でも、ありました。悪戯小僧の私が卒業できましたのも、全て先生の御陰でありました。

先生との永遠の御別離をしなければならない今、先生からラグビーを通して叩き込まれました石桜精神を、終生の旗印として宮古の場で貫き通すことを御約束し、大変悔やしく残念でありますが、御別れを申し上げます。

最愛の奥様と、御家族はもとより、私たち教え子一同の将来も、どうぞお見守り下さい。

戸嶋正夫先生、どうぞゆっくりとお安息下さい。

故戸嶋正夫先生略歴

旧2回生。日本体育専門学校(現日体大)卒業後、昭和10年本校着任、昭和48年教頭就任。昭和59年に退職されるまで県体操協会会長、県ラグビー協会会長、県高体連理事長などを歴任、本県体育界の重鎮であった。
平成4年3月2日、逝去。

「三田義正」

人材育成と果断の事業家

石桜振興会から近々刊行

母校創立者である三田義正翁の生涯を描いた連載が「盛岡タイムス」紙上ではじまったのは、昨年5月からである。週二回のペースで続けられ、本年6月第百回余で完結をみた。連載中郷土史家をはじめ、各方面の読者から読後感や励ましの電話が盛岡タイムス社の筆者藤井茂氏に寄せられた。

義正翁の実弟、岩手医専創設者三田俊次郎氏については「石桜五十年史」に記述されているぐらいで、まとまったものは皆無であった。

母校関係者の中には数十年前からその人物像についての研究に関心が寄せられていたが、昭和62年、石桜振興会の中に「三田義正翁を語る会」が正式に発足した。会長は旧13回卒の牟岐梧楼氏である。

以来翁の謦咳に接した人人の思い出を聞き、事蹟を調べ、記録を重ねるための会合が年二、三度ずつ続けられた。史実に詳しい池野藤兵衛氏を招いたり、郷土の人物史家藤井茂氏の同席を得て数人が集いを重ねた。

藤井茂氏の研究対象が義正翁に向けられているのを知り、同氏の執筆を積極的に支援したいという声も上がった。

藤井茂氏はその後盛岡タイムス社に勤務、多忙の時間の中前述の連載がスタートした。このほど完結を持って義正翁生誕百三十年を語る会」が正式に発足したというものである。

◇　◇

本書では父義魏を中心とした家庭生活、教育熱心で、生涯勤倹の人だった母キヨの影響から説き、藩校での和漢洋学の勉強、仙台、東京での遊学、青春時代へと筆が運ばれる。

事業への朋芽、政治への意欲、火薬鉄砲店の開業から森林業、事業の飛躍へと移り、人材育成のための学校設立へと展開する。

中学教師の群像、盛岡市の街地開発と多くの人物との出会い、そして別れまで、義正翁の生涯が平易な文体で綴られている。

序文は松見得明石桜振興会長、巻末に西在家寛校長の「義正翁と岩手中学」の文も収められていて同窓生各位にぜひおすすめしたい好著である(本年内刊行予定)。広く同窓生諸兄の購読が期待されている。

O・B・短・信

平成四年

●桜三五会(新12回生同期会)　1月3日　佐善にて西在家教頭(当時)を迎え、約40人の盛会。

●軟式庭球部OB会　1月4日　山留にて、村上先生の高体連表彰、県体協表彰祝賀会を兼ねて42名が集う。

●旧18回生同期会　5月30日　大清水多賀にて、西在家校長を招き40名の盛会。

●桜泳会(水泳部OB会)　6月20日　ヴィラ加賀野にて、プール開きに30人参加。菊池健先生、遠藤(貫)先生出席。

●桜球会(野球部OB会)　6月24日　初駒にて、中屋敷監督、本館コーチを囲み約40名参加。今後の結束を誓う。

●軟式庭球部OB会　8月1日　山留にて15人参加。東先生出席。

●剣道部OB会　8月1日　ある岩にて、工藤先生、現役部員7名を囲み、OB約20名が激励。

●新2回生同期会　8月14日　ホテルニューカリーナにて、村上先生を迎え45名の参加。

●新30回E組クラス会　8月22日　こう弥にて、遠藤(清)先生を迎え、深夜まで痛飲。翌23日は雫石ゴルフ場でコンペ開催。

●旧13回生同期会　9月9日　愛真館にて、西在家校長を招き約30名が集う。

●新15回生同期会　9月19日　新亀屋にて、西在家校長を迎え40名が再会。

●新14回生同期会　10月24日　大清水多賀にて、西在家校長、池口教頭、高橋(精)先生、佐藤先生を迎え約80名の大盛会。佐藤先生はOBとして、この日は「佐藤君」?

●石桜体操クラブ(体操部OB会)　10月26日　こう弥にて、足沢先生、菊池(軍)先生を迎え約二十名で痛飲。

●テニスクラブ激励会　10月29日　1&1にて、本多先生を囲み、硬式テニスを愛好するOB約10名が集まり、今後の活躍を激励。

●石桜教職員会　11月6日　サンセール盛岡にて、西在家校長、池口教頭、中館教務主任、村上先生、菊地先生が、教職に就いているOB11名と懇談。

●新13回生同期会　11月7日　ホテル三右衛門にて、村上先生を囲み、約40名が旧交を温める。

●旧大石桜会　11月19日「慕情」にて、日大OB13人が村上先生、松見同窓会長を囲み盛会。

●紫桜会(新18回生同期会)　11月21日　ホテル大観にて西在家校長、中村先生、村上先生を迎え、思い出話に花が咲く。30名出席。

●岩手町石桜会　11月28日　発足三周年を迎え、益々意気あがる。

◆　◆

佐々木益人君(旧10)　11月3日、秋の叙勲において地方自治(林業行政)の功労に対して勲四等瑞宝章を受ける。

加藤弘君(新3)　10月16日、小、中学教育に尽くした功により、教育功労者として文部大臣表彰を受ける。

稗貫明彦君(旧10)　10月16日、私立幼稚園発展の功により、教育功労者として文部大臣表彰を受ける。

高橋章浩君(新4)　8月6日から10日まで、盛岡市大通・クリップギャラリーにて「ガラパゴスの不思議な生物たち」写真展を開催。55点の写真を展示。

◆

池口杜孝教頭　11月19日私学教育振興の功により岩手県知事表彰を受ける。

編集後記

石桜精神の具現者とも言うべき、戸嶋正夫元教頭先生が去る三月二日永眠なされました。本紙は、新17回生、伊藤勢至君の哀切極まる弔電を拝借し、紙面に録することで哀悼の念を表したいと思います。

本年度は、新校長、新教頭のもと、生徒達も良き伝統の継承と新しい歴史の創造に向けて、クラブ活動や生徒会活動も活発だったようです。

御引退なされた遠藤貫中先生、本当に長い間御苦労様でした。(W)

メンズファッション&スクールウェア
㈱佐藤被服
本社　盛岡市肴町　TEL　(代)(24)3797
営業所　紫波郡矢巾町流通センター
TEL　(代)(37)2661

スタジオ撮影・各種スピード写真・各種カメラ
カラー・D.P.E・記念出張撮影
フォトMORIOKA
池ノ谷　忠　正
材木町信用金庫向　TEL(22)7457

ヤマハピアノ・エレクトーン・ステレオ
伊藤楽器店
盛岡市中央通り1丁目11の12
TEL　(24)3854